

# 過渡期の一知識人における異文化接触の意味

——名倉予何人の場合

春名 徹

はじめに

上海にたいする関心のたかまりのなかで、文芸、歴史の双方の場で日本人の上海経験が語られることが目立つようになった。

なかんずく文学系統の研究者に顕著な、日本人の言ディスクリ説を論じようとする最近の傾向のなかで、最初の日本人の上海経験である千歳丸の派遣はしばしば考察の対象とされている。だがその経験の取り扱いは所詮は風俗モードとしてのそれではないかという思いを禁じ得ない。

筆者は一九八七年に執筆した論文（春名・一九八七）ですでに千歳丸にかんする記述の全体像を示し、その中国経験の意味は総体として考察すべきであることを指摘した。その後、中牟田倉之助の「上海行日記」や峰潔の「船中日録」など当時写本でしか存在しなかった記録を鉛印に付して注解を加え、すくなくとも共通の認識のもとに研究が進展することの準備を行ってきたつもりである。（春名・一九九七／一九九八）。

にもかかわらず依然として千歳丸の経験が総体として論じられることが少ないのは何ゆえか。現代に生き、自分もまたその歴史的環境から自由ではないことを自覚している歴史研究者としては、そのこと自体が考察に価するとすら考え

いる。

しかし千歳丸関係者の記録の多くが公開されて研究者に閲読可能な時代にあつて、なおかつ千歳丸の言説の総体を考察することなく、とりわけ高杉晋作をもって千歳丸を代表させる論考が後をたたないことは、それ自体が検討に値する。<sup>(注1)</sup> 参加者のうち高杉が現代においても著名な人物であること、いわゆる維新の功労者としてその記録がもっとも早くから印刷に付されていて人の目に触れやすかったことなどが原因であろう。夭折した高杉の記述は同時代には閉ざされた記録であつたにもかかわらず評論に値し、東京下谷で困窮のうちに生涯を閉じた名倉予何人の、<sup>(注2)</sup> ある意味で陳腐な言説は、同時代にもっとも普及したにもかかわらず考慮に値しないというのであれば、それは最初から知の放棄とはいえないであろうか。

だが〈風俗の犬ども〉にたいして、これ以上は紙数を費やすまい。本稿においては、これまで総体として考察されることのなかつた浜松藩士・同藩藩校克明館教授名倉予何人の記録の再吟味を行う。そのことによつて日本人の上海にかんする言説の意義を考察する出発点としたい。

ではなぜ上海なのか？ 東アジアの近代を考察するにあたっては、当然近代化 Modernization と西欧化 Westernization の相違が考察の対象とならざるを得ない。その場合、相対的に歴史の浅い伝統的中国都市の上に西欧型の租界 Settlement が植え込まれた複合都市としての上海が好個のモデルを提供するからにはかなならぬ。

総体として千歳丸の意義を考えようとした試みとしてジョシユア・フォーゲルの『日本人の紀行文学における中国の再発見——一八六二—一九四五』がある (Fogel 1995)。日本人にとつて観念上の知識にすぎなかつた中国が近世の末から現実に触り得る存在となつたことをつうじて、フォーゲルは日本人の国経験を「再発見」と捉える。その開始時期はいうまでもなく千歳丸の上海派遣の年一八六二年であり、敗戦による中断の年一九四五年を一応の終期とみなす。卓抜な視点であるが、日本の歴史研究者のなかでは、その「再発見」Rediscovery の意味はまだ充分には認識されていないようだ。しかし彼の著述の意義については他に論文を準備中なので別の機会にゆずる。<sup>(注2)</sup>

もとに戻つて名倉にかんしていうなら、彼はその後数回にわたつて中国、ヨーロッパへ旅行し、その度に記録を残し

ているので、それらの記録を再読することによって、より広いコンテキストにおける幕末維新期の日本人の異文化経験の意義を問うことが可能となるであろう。

以上の展望のもとに私の考察は名倉を対象とする。

### 名倉の経歴と上海行の位置

名倉予何人の経歴の基礎となるのは、石川兼六が漢文で記した「名倉松窓傳」である。石川兼六（号は文莊）は、晩年の名倉と交流があり、根岸の隠居所にしばしば名倉を訪れたと自ら記している。

石川文莊は「本朝瞽人伝」「本朝盲人伝」の著書をもつ。幕末維新期に篆刻家として知られた中井敬所の甥である。彼は島田篁村の門下生として浜松の名家の出である内田周平（号は遠湖）と同門でもあった。周平の父はすなわち内田乾隅（一八一〜一八九九）文化八年（明治三十二年）で、名倉の同時代人である。したがって石川は内田周平をつうじて名倉評を聞きうる立場にあった（浜松史跡調査顕彰会専門委員会・一九七七）。つまり彼らは世代の相違はあるものの同じ浜松知識人のグループに属していたのである。

つけ加えるならば、周平の兄内田正太郎（改名後は正）は藩校・克明館で直接、名倉から学んだ。周平の子である内田旭も名倉にかんして記述しているが、多くは父や叔父の残した家蔵の文書によっている。

石川の「名倉松窓伝」には、少なくとも二種類の写本が伝わっていた。内田家本（現在は所在不明）と栗本松靄の蔵本（松靄郵舎文庫本）である。内田家本は、内田遠湖がいくつかの他の文章とともに『東洋文化』五十号（東洋文化学会 一九二八年）の「文叢」欄に掲載したことがある。しかし同誌の該当号を架蔵する公共機関は多いとはいえないので、栗本松靄の筆録による「海外壮游詩」（内題は「壮游餘録」）を底本としてここに全文を掲載する。<sup>(注4)</sup> 原文は漢文。「……」は原文では割注である。

栗本松靄は「内田旭氏所蔵写本」による頭注を加えているので、厳密なテキスト校訂は注に掲げた漢文テキストで行った。なお適宜、文章をきって解説を加えた。

文莊 石川兼六

名倉松窓、名は信敦。字は先之。松窓と号す。また予何人と号す。初め野田氏を称す。通称は重次郎。その先は遠州奥山の人。南朝の時、名倉主膳という者あり。勤王の事に克む。子孫は世々神官となる。父信芳は濱松藩主井上公を奉じ、公に従って奥州棚倉に移り、松窓を生む。〔松窓は〕幼くして穎悟（聡明）、年甫十一にして吏に任ぜらる。

天保七年（一八三六）十二月。公に従い上州館林に移居す。後數年、暇を得、笈を負って江戸に遊び、佐藤一齋、安曇良齋に贅を執る（就学する）。のち昌平齋に入り、研鑽怠らず。

弘化三年（一八四六）、學成り帰郷す。復た公に従って遠州濱松に移居す。蓋し舊封に復せし也。尋ねて儒官に擢せらる。】

文化十四年（一八一七）、浜松から棚倉〔福島県〕に転封を命ぜられた井上河内守正甫の下級家臣団のなかに名倉信芳（一七七三〜一八五七）安永二年（安政四年）がいた。名倉予何人はその嫡男である。

浜松史跡調査顕彰会専門委員会編纂『浜松の史跡続編』（一九七七）の「名倉予何人とその父信芳の靈域」の項目の執筆者は、名倉の父について「予何人の記す家譜」を参照しており、父は通称仁兵衛、字を至極、号を東原といったとする。さらに「名倉松窓伝」よりもやや詳しく、始祖の主膳は地方の豪族奥山朝藤に仕えた。朝藤は宗良親王の配下において駿河守護の今川氏と争ったが、今川氏の遠江制圧により、名倉主膳は奥山朝藤の三男源太郎を擁して奥山の村里に隠れ、土地の神官を勤めて土着した。その七代目、新右衛門が遠江に所領をもつ旗本近藤氏の用人に召しだされた。新右衛門には二男があつて長男は家職の神官を継ぎ、次男がすなわち名倉信芳であるという。

信芳は、井上氏の家臣塩谷某に仕える陪臣であつたが、後に同藩の足輕となつた。「恐らくこの出仕にいたつた事情はその後の履歴や伝えられる性行から推して、その財務感覚にすぐれていたからではなからうか」（『浜松の史跡続編』）。歩士目付、勘定格兼納戸奉行、中小姓兼数奇屋頭と累進、十人扶持を給されるに至つた。

この系統の記述では名倉氏は故あって一時野田姓を名乗ったとする。名倉予何人自身が上海行きの際に野田氏を名乗ったらしく、同行した大村藩の峯源蔵は、名倉の名の傍に「野田重次郎」と書いている。また当時、同藩の長崎聞番であった中尾静摩の「日録」にも、上海から帰国した直後の「野田重次郎」から日記を借覧した記事がある（春名・一九九八に引用。原文は中尾博一「中尾静摩日録」(三三)／『大村史談』十五号 大村史談会 一九七八年）。

ほとんど唯一の例外として「藩士野田仁平の長男、のち同藩士名倉信芳の養子となる」(三百藩家臣人名事典4)という記事があるが、俄には信じがたい。

【嘉永三年(一八五〇)、江戸に再遊し、昌平齋に入る。再び箕作氏に従い、洋書を読む。明年(嘉永四年)一八五二) 帰郷す。

安政四年(一八五七)父を喪う。哀毀、過禮に過ぐ。明年(一八五八)、職を辞す】

江戸で蘭学を学んだことは、彼の後年を考えると重要な意味がある。また父を失った後の行動をみるとその性格には激しいものがあつたようだ。父を哀悼するあまり職を辞している。そして林鶴梁に父の墓碑の撰を依頼した。名倉は、林が遠州中泉の代官を勤めていた時代に親交があつたのでその縁を頼つたのである。墓碑は浜松城下の齡松寺にあつた。

【文久元年(一八六一)、また江戸に遊ぶ。慨然として時事に感ずるところあり、諸名家に就きて兵法を修む。

明年春(一八六二)、航海して清國上海に遊ぶ。海外之遊、是をもって始めとなす。「此行を與にするものに中牟田倉之助、高杉晋作あり。鍋田三郎右衛門にしたがう。上海に抵る。幕府一萬五千両を出す。長崎において和蘭國船(原文のママ。イギリス船が正しい)を購う。名づけて千歳(丸)とす。風濤を冒し(航して)遂に通信通商の締結をなす。『海外實録』あり。」その夏、歸朝す。十二月、特命により世禄七十石を賜る。行(人)に階を進め、文學および兵馬の事をつかさどる。】

千歳丸の上海渡航にかんしては煩をきらつてくりかえさない<sup>(注5)</sup>。名倉は幕吏・鍋田三郎右衛門の従者として行に加わつたのである。「通信通商の締結をなす」は事実とは異なる。日本側は条約を希望していたが、上海道台・呉煦はこれを嫌

い、オランダ領事を介した貿易（すなわち政治関係抜き、経済関係）を望んだ。また彼の記録の名は『海外實録』ではなく、『海外日録』である。

また名倉にかんしていえば、上海行きの直前に江戸に出て兵法を学んだこと、上海が、四次にわたる彼の外遊の最初のものだったことに注意しておきたい。

【明年冬（一八六三）、再び西洋（フランス）に遊ぶ。是を第二航となす（此行は池田筑後守に随う。『航海日録』の著あり）。元治元年（一八六四）七月歸る。尋いで階歩を進め進士長となる。其職は故の如し。

慶應二年（一八六六）十二月、「幕」府、特に命じて清に遊ぶの印章を賜る。明年（慶應三年）正月、商民を率いて上海および金陵（南京）に遊ぶ。是を第三航となす。『壯遊日録』の著あり。四月歸朝し、王政維新に遭う。】

第二航は池田筑後守のいわゆる「横浜鎖港談判使節団」であった。この使節団は帰国して、与えられた使命が現実的ではないことを説き、処罰された異色の使節団であるが、譴責は随員の名倉までは及ばなかったようである。

第三航は幕府から上海と南京へ派遣された。帰国した彼を待っていたのが維新であったのは歴史の皮肉である。

【元年戊辰（明治。すなわち一八六八）。公は朝旨を奉じて勤王の兵を出す。家老伏谷又左衛門、隊師となり、松窓これがために参謀たり。副総督柳原公に随って東征し、甲府市尹となる。

明治二年春。職を罷めて帰郷す。四月、公に従って居を南總鶴舞に移す。八月、更に開拓大主典に任ぜらる。十一月外務大録に転ず。

明年（明治三年）大佐となる。】

浜松藩は恭順の立場をとって兵を出した。この時、征東副総督・柳原前光との縁が生じる。

浜松藩は明治元年、駿府藩の新設に伴い、井上正直は旧領の遠江、下野、下総の大部分を収公され、新たに設けられた上総鶴舞藩六万石に入封した。現在の千葉県市原市鶴舞の地である。明治二年四月に藩庁を市原郡石川村に置く。しかし同年、版籍奉還、明治四年の廃藩置県で廃藩となった。

名倉は新政府に仕えた。このうち「大佐となる」は解しがたい。大佐は武官であるから名倉の経歴になじまない。内田

本『東方文化』所載のもの)には「大佑」とあり、これが正しかろう。

【是歳七月、柳原に随い文書正として節を持って清國に使う。是に先んじて松窓、通商の事宜を建白す。政府、可として遂に此命ありしなり。是を海外第四航となす。『駐清謾録』の著あり。是時、清國大臣と通商を天津の内に協議す。約條成る。柳原公詩を贈りて云。「數篇ノ策太イニ公明ナリ。手ニ唾シテ一朝、功業成ル。須カラク燕然、山上ノ石ニ鑿シテ、先鞭、正ニ勤ム信敦ノ名」と。閏九月に帰朝す。】

柳原前光と名倉は戊辰戦争のときの知己である。「日清修好条規」の予備交渉が目的である。『駐清謾録』は伝存しない。名倉の建白書を発見、検討する要があるが、後日を期したい。

【四年秋、病をもって職を罷す。後に更び元老院書記、修史館掌記に任ぜらる。

廿一年五月。清國巡撫部院劉三省(名は銘傳)の招に応じ、井工を率いて臺灣に到る。是を海外第五航となす。三省、ために金若干を贈り、跋渉の勞に酬す。蓋し舊友之故を以て也。尋いで府学校教習職に任ず。十一月辞職して帰る。後ふたたび台湾に遊び通商をなすの志あれども、奸商の欺く所となりて果たさずしておわる】

「日清修好条規」の本交渉にあたっては、名倉は参与していない。病の故であろうか。

【廿六年一月、病に罹る。自ら起たざるを知る。枕上、詩を賦し、辭世の作に擬す。後、病少し愈す。蠟殼街(日本橋蠟殼町)より根岸の里に移る。時に征清之役(日清戦争)、まさに起らんとす。松窓慨然として詩あり曰く。「大風吹起ス遠征ノ春。根岸ニ居ヲ移シテ世塵ヲ避ク。野老ハ國事ヲ知ラズ。一瓢ニ酒ヲ盛リテ花辰ヲ待タント」。

時に松窓、赤貧洗うが如し。門に掲ぐるに二牌をもってす。曰く「漢學教授」。曰く「圍棋仙集」。而して家に長物なし。唯、破書數卷、棋枰一局のみ。一夕近隣に失火あり。松窓が屋に延焼す。門生澁谷某有り、驚惶、走り来りて松窓を扶けて避しむ。已にして松窓、病に罹る。乃ち某を招き謝して曰く、余中歳以後、輒輒連遭。事、志と違えり。子男は先に没す。曩に航海之時。著書數卷あり。我畢生の精神を注ぐの所、今空しく蠹魚がために飽く所となる(紙魚に食べられるのみとなる)。託す所の者なし。擧げて吾子に贈り、以て聊か昔日之勞に報せんと。後數月にして没す。年七十餘(八十歳が正しい)。實に〔明治〕三十四年一月廿七日也。

澁谷某、門生と往紀して喪事をなし、橋場法源寺に葬る。某は千住の人。家世、商を業とし篤行をもって聞ゆ。翁著す所の四次遊記の外、「刀陣提要」、「實操摘要」、「續周易考」、「日本記事」等の書あり。】

最後の台湾行き以後、名倉の困窮はここにみるとおりである。つぎの石川兼六の言も晩年を知るものとして補うところがある。

【石氏（石川兼六）曰く。余、壯歳しばしば松窓を根岸の里に訪う。松窓は年七十餘。容貌甚醜し。頭は顛秃にして齒牙は豁る。性すこぶる酒を嗜む。杯杓口を離さず。酔えば則ち詩を賦す。琅々之聲、障壁を動かす。客ありて談、時事におよべば則ち曰う。茫々たるかな天地、已に知己なし、人間萬事、皆、心と違う、と。余復た何をか言わん。嗚呼、松窓夙に有為の志あり、事業を規畫すれど中歳以後、轆轤落魄、豈悲しまざらん哉、因って為に伝を立つ。】諸書の名倉予何人にかんする記述はほとんどこの記事を出るものでない。ただし内田旭（内田・一九五五―一九九四）は、近親者からの伝聞によって名倉の性格をうかがうに足る挿話をいくつか加えている。

要するに名倉は、その千歳丸による上海行にはじまり、生涯に中国と台湾、ヨーロッパへ行くこと計四回、その度に克明な記録を残した。にもかかわらず次第に世間とは距離が隔たり、ついには陋巷に窮死したのである。

### 名倉予何人の上海経験

すでに見たように名倉は文久二年（一八六二）に千歳丸で上海に行ったことが最初の対外経験となった。彼がなぜこの企画に参加し得たのかは確証がないが、高杉や中牟田の例から推測できるのは、江戸留守居役その他の役職者が幕府の官船派遣計画を知り、しかるべき人材を派遣すべく活躍した可能性である。浜松藩主・井上河内守は、老中を勤めたことがあるから、この種の情報が入手しやすかったものと思われる。

さて上海における名倉であるが、「支那聞見録」「海外日録」「滬城筆話」「滬城筆話拾遺」の四種を残している。このうち「支那聞見録」「海外日録」は、東洋文庫に中山久四郎旧蔵本があることが比較的よく知られており、このテキストをもととして田中正俊が詳細な紹介論文を書いた（田中正俊・一九七二）。その後、田崎哲郎による鉛印（田崎哲郎・一九八

六)、小島晋治の編集した『幕末維新中国見聞録集成』に収める影印本(小島・一九九八)がある。後述する京都大学本とは多少のテキストの異同があるが、本質的なものではない。

「滬城筆話」「滬城筆話拾遺」は、上海での筆談の記録である。当時の日本人の中国でのコミュニケーション手段は知識人との筆談であったから、筆記の手控えは重要な記録でもあった。峰なども日記と筆談記録をセットで残している。

本来、内田家にあった名倉の筆記類は現在、所在不明であるが、京都帝国大学文学部国史研究室の内藤晃が、昭和十七年に当時の当主・内田旭を訪れて謄写本を作成したものが京都大学に現存している。おそらく白柳秀湖による内田家本の紹介(白柳秀湖・一九四〇)が採訪の動機となっている。

上海行の前掲四種のほか、遣欧使節にかんする「航海日録」、二度目の中国行にかんする「二次壯遊録」「航海外日録拾遺」(筆談の記録)、およびこの行に同行した安倍保太の「支那見聞録」(仮称)がある。最後のものは白柳も紹介しており、当時、静岡県浜名郡笠井町の森田福造の所蔵であった。

私はかつて京都大学関係者のご好意でこれらの影写本を子細に検討する機会があったので、浜松の調査の結果、内田本の所在が不明であることが明らかになったいま、京都大学の影写本によって以下の記述を行う。

このうち「海外日録」は、藩校克明館で直接、名倉に学んだ内田正太郎(のち改名して正)が、十五歳のときに筆写したものであり、名倉自身が校閲して朱を加えている。

### 上海の経験

千歳丸にかんする名倉の記録『海外日録』は、かなり体系的である。巻頭の序ともいうべき場所では、

「此挙ハ寛永以前ノ朱章船ヲ復シ玉ヘル意ナルニヤ然レトモ官吏ノ 台命ヲ受テ故ラニ入唐シ玉フハ室町氏以来希有ノナレハ此行ニ預カル者皆自ラ奇異ノ思ヒヲナス豈一大愉快ナラスヤ」

とのべる。

このような明確な歴史認識を示した例は千歳丸関係者の他の記録にはみられない。同時に名倉のこのような認識は、

たとえば千歳丸の派遣自体は一部の幕吏の利己的動機にすぎぬ、と冷やかにみていた高杉にくらべて、やや大時代であることも認めねばならない。

日記はまず長崎—上海の五日間の航海の記録に始まり、港から眺めた上海の繁栄におどろき、やがて上陸して、中国の群衆と旧市街の狭さ汚さに驚く……その限りでは千歳丸の経験のなかの普遍的な側面を示している。

ただし名倉の独自性は、まず上陸前に、同行者のうちアメリカ経験のある者一名に相違を尋ねている点にある。

「同舟諸士ノ内ニ前年米利幹へ赴キタルモノ兩名アリテ物語ヲ聞ニ米利幹ワシントン。ニューエロク。ニモ遙ニ勝リタル繁昌ナリト云ヘリ」

この評価そのものはどうかと思うが、ともかく彼には異文化を比較してみようという感覚があったことは評価せねばならない。同行者のうち小人目付の塩沢彦次郎が万延二年（一八六〇）の遣米使節に随行していることは判っているが、もう一人は不明である。

上陸後、使節団の公式メンバーは上海道台・呉煦を表敬訪問した。このときには名倉は鍋田の従者として随行している。高杉晋作は病気の自分以外のすべての従者は同行した、といっている（「上海淹留日録」五月八日条）。もちろん会談に加わったわけではなく、従者として控えの間に待たされただけではあるが、その描写は詳細である。

「道臺ノ衣冠頗ル莊嚴ナリ冠頂ニ珊瑚ノ徑リ寸許ナルアリ冠ノ後部ニ羽毛ヲ戴ク」

二品の官吏の頭頂であるから玉は珊瑚。さらに孔雀の羽をいただくことを許されていたことを正確に記している。他方、ほかの従者たちの記録に見えるように、道台府の下役の野卑さには触れない。おそらく名倉のなかにある儒学の教養に裏づけられた素質が、中国の悪い側面を記述することをためらわせたのである。

彼はまた軍事に関心があり、しばしば中国軍の訓練を参観に出掛けた。大村藩の峯潔（源蔵）などは、名倉の軍事好きをいささか軽んじていたようにもみえる。

しかし先に見た伝記史料によれば、彼が兵事を学んだのは比較的に新しい。すなわち文久元年（一八六一）に江戸へ再遊して「時事に感ずる所あり」兵法を学んだ。海禁は一面で海禁政策を侵すものを軍事的に排除する実力である。必然

的に当時、対外関心は「海防」として捉えられる傾向があった。したがって時事に感じて兵学を学んだということは、単なる排外主義とは違うだろう。ただし名倉の指向が軍事技術に偏っていたこともまた事実である。

しかし一方では名倉には、江戸の昌平黌で学んだという意識がある。潜在的にこの連帯感はやや重要な働きをしている。少なくとも高杉、伊藤、名倉のあいだには同窓意識とでもいった感情があった。

それは納富が客観的な目で指摘した「書生」の意識とつうずるものがある。

「我中牟田倉之助、長州の高杉晋作、会津の林三郎、遠州の名倉予何人、大坂の伊藤軍八、尾州の日比野掬治等本ト書生ナレバ、就中筆語能ク通ゼリ」（上海雑記）。

ただし中牟田倉之助にかんする評価は同じ佐賀藩人として多少、甘いようでもある。納富自身が、このすぐ後で中牟田はむしろ英語を学んだ人なので中国人との詩文の応酬などは出来ず、苦労したと自分でのべているという趣旨のことをいっている。

ややもすれば孤高を誇りがちな高杉ですら千歳丸に乗船して伊藤軍八と再会したとき、つぎのようにのべる。

「予の後に従臣至るも未だ尽くは其の人を知らず。一人あり、其の言語を聞くに、殆ど旧知己の如し。熟之れを看るに、乃ち浪速の処士伊藤軍八なり。軍八は頗る文事あり、予嘗て昌平塾に於て同学すること一年なり。計らずも再び此の地に逢ふ、況んや船を同じうし行を同じうするをや。談話すること旧の如く、俱に称す、実に奇遇と謂ふべきなりと」（航海日録）

このような感覚の上になって、高杉は留守居当番の日に名倉を訪れた中国人と筆談を残したり、名倉と詩の応酬をしたりしているのである。同行者のなかでは中牟田以外は共に語るに値しないと日記のなかで記している高杉ではあったが、昌平黌で学んだ同輩にたいする共感も明らかで、そこに名倉との交流がなりたっていた。

名倉はまた年少者に優しかった。一行のうち年少の画家・納富介助は上海に着くとすぐに痢病に罹り、大部分の時間を宿舎で床に臥せてすごしたが、その『贅臈録』には、病床で得たにしては鋭敏にすぎる多くの見聞が記されている。名倉の『海外日録』と対比すると、いかに名倉の見聞を材料にしていたかがよく判る。病気がちだった納富をいたわり、

自分の見聞したところを伝えたものようである。彼の教育者としての意識が働いたのであろうか。

### ヨーロッパへ

名倉において興味を惹かれるのは、その翌年、池田筑後守長発の使節団に加わって勘定格調役・田中廉太郎の従者の名目でヨーロッパに赴いたことである。

その記録『航海日録』三冊と『航海外日録拾遺』一冊は名倉敦、高橋包の連名で書かれている。高橋包は『航海日録』に目付・河田相模守熙の従者として名のあがっている高橋留二郎のことだろう。名倉同様、浜松藩士で、岩松太郎の『航海日録』には「実ハ井上河内守殿御家来勤案仕奉行ニシテ給人同様ナリ」とある。

巻頭に「文久三年十二月、公使台命ヲ含ミ海ニ航シテ西洋ニ赴ク。敦包等幸ニ陪従スルヲ得タリ」とあるのみで、連名の日記である意味は判然としない。文体はすでに『海外日録』でなじみのある名倉のものだが、高橋の記録が何らかの形で反映しているのであろうか。あるいは帰国後、藩に対する報告という意味合いでこのような形式を採用したのかもしれない。

『航海外日録拾遺』は、この航海の最初の部分、上海に寄港したさいの筆談記録である。

本使節団はいわゆる横浜鎖港使節団で、フランス士官カミヨンが横浜郊外の井戸ヶ谷で攘夷派の日本人武士に斬殺された事件をきっかけとしてフランスのナポレオン三世のもとに攘夷のもとで危険回避のため横浜を閉ざすことを要請するため派遣された。しかし池田らは交渉を重ねるにつれて使命の達成しがたいことを痛感し、賠償金の支払いなどを調印した後、他の諸国をめぐることなく鎖港交渉を打ち切ったに帰国した。

重大な台命違反であるから、池田は御役御免、隠居、逼塞。河津伊豆守と河田相模守は閉門という処分を受けている。外国奉行支配組頭として参加した田辺太一も閉門百日に処せられた。

しかし類は従者にまでは及ばなかったようである。名倉にもこの件の影響は認められない。この使節団の随行者のなかからは、大審院長となった西吉十郎（成度）〔調役格 通弁御用頭取〕、男爵・益田進（孝）〔通弁御用当分御雇〕、医学

博士・三宅復一（秀）〔田辺太一従者〕などの人材を輩出した。また理髪師の資格で同行した乙骨巨は『海潮音』で知られる文学博士上田敏の父である。

この航海にかんする日記は必ずしも多いとはいえない。わずかに先に言及した河津伊豆守の従者・岩松太郎の『航海日記』（『海外使節日記纂輯三』）と三宅秀の『欧行日誌』（三浦義彰『文久航海記』に収める）が公刊されている。

一行は文久三年十二月二十七日にフランス軍艦で横浜を出帆、上海からはフランスの郵船を乗り継ぎ、香港、サイゴン（現ホーチミン）、シンガポール、セイロン、アデンを経て紅海に入り、汽車でカイロを経てアレキサンドリアへ出、地中海を船で西航してマルセイユに上陸、そこから陸路汽車を利用してリヨン、アビニオンなどを経てパリに入っている。岩松太郎の『航海日記』は平凡な記録で何日にどこに居り、何をしたか、食事で何を美味と感じたか、が判る程度の内容であるが、一か所だけ鴨丁（アデン）で名倉に言及している。

「○名倉上陸し左右を見るにラクタ、ロバ沢山ニ有之と云由又亜刺比亞の内にヤロウの者共も有之候と云由し」（二月十三日条アデン）。伝聞形なのは名倉の言を高橋経由でも聞いたものか。

同日の名倉自身の日録には——「食後小舟ニ乗シテ上陸シ 更に馬車ニ乗ジテ東ニ至ル 左ハ海ニ沿ヒ右ハ岩山家々トシテ天空ニ聳へ 其容于突出怪岩奇峰多ク烟雲帯ヲナセリ」云々とあってかなり綿密にアデンの観察をのべている。アデンにおける名倉の感慨は別に、アラビアが独立していることにあったのだが、それは後述する詩においてのみ示されている。

高橋留三郎にかんしては同じ河津の従者であるから岩松の『航海日記』には名倉よりは言及が多いが、それもパリにおいて主人河津が留三郎を供に外出。帰ってからの話では「色々珍敷物〔唐シ、山猪其外色々〕見物致候と申由」（三月十二日条）という程度のことにはすぎない。

もっとも同日、名倉も同行して外出したらしく、その記録によると一行は動植物園を見学した。名倉は他にジラフ、象の曲芸などについて記し、『博物新編』を利用して考証を加えている。ちなみに『博物新編』は今回の旅において名倉がしばしば利用した西欧への手引きであった。合信（ベンジャミン・ホブソン）著、広州 一八五五年刊。一三二丁。

ホブソンはロンドン伝道会所属の宣教師で、自然科学（当時の概念では博物学）にかんする入門書として中国語で本書を書いた（Wylie 1867-1967）。日本にも舶載され、文久年間には訓点翻刻本も出された（小沢三郎・一九七三および吉田寅・一九九八）。

名倉を始めとする千歳丸関係者の上海紀行には『博物新編』への言及はないので、おそらく名倉は帰国後、日本で入手したものと思われる。同じ文久二年（一八六二）の第一次遣欧派遣使節団が『博物新編』を利用した例がある。この時までに翻刻が行われていたか否かは判然としないが、仏教関係者がキリスト教書の流入を憂えた護法書でしばしば指弾されるので、舶載か翻刻かは別として流布ぶりを推定することができる。

ちなみに第一次遣欧派遣使節団の市川渡（一八二四〜？）が『尾蠅欧行漫録』のなかで「今日御三使博物館ニ行カル」としたのが「博物館」という言葉の初使用例とされる（国立東京博物館百年史）。その数日前、市川は動物園でダチョウを見て『博物新編』に拠って解釈を試みているので、博物館の造語の背後には『博物新編』があったと考え得る。

市川は岩瀬忠震の家臣、文久遣欧使節団には副使松平石見守康直の従者として参加。のち文部省官吏となり「書籍館」（図書館）創設の建白を行った。日本の図書館創設の功労者である。その『尾蠅欧行漫録』（遣外使節日記纂集「二」）はアーネスト・サトウが全訳を企画し、ロンドンの『チャイニーズ・アンド・ジャパニーズ・レポジトリイ』誌に連載で訳出されたが、同誌の廃刊によって未完に終わった。

名倉自身の記録としてみれば「航海日録」は、上海行き「海外日録」以上に平板な印象を与える。日常の見聞はほとんど均等に割り振られて記録されているが、大きな発見や感想はみられないのである。おそらく中国においては彼の判断の基準となっていた儒教的な価値が、ここでは通用しなかったからではないだろうか。

とはいっても名倉は、遣米使節の村垣淡路守の日記に典型的にみられるように、すべてを儒教価値を基準にして計って、アメリカは礼のない国だから仕方がない、ときめつけるほど頑ではない。むしろフランスに入って歓待されることに喜びを感じてしまうのである。

マルセイユの人々が日本の品を貴重品扱いにすることに関連して、彼は使い古しの煙管をナポレオン金貨一個で買い

たいという人物に煙管を与え、蛮杖（ステッキか）と交換した上でつぎのように言う。

「凡そ虜輩ハ童児ニ至ルマデ皆吾輩ト相親シミ狎レンコヲ欲ス 毫モ厭ヒ畏ル、色ナキナリ 蓋シ西洋ニテハ常ニ世界萬國ノ人ト交接スルガ故ニ今吾輩ヲ見テモ狎昵スルコト如此ト見ヘタリ」（『航海日録』一 三月十三日条）

日記中、唯一名倉のナシヨナリズムを感じさせる箇所は、一行中で両刀を脱して、洋服を着て夜、彷徨する者がいることに不快の念を表明した場合である。

「小晴 小吏中ニ蛮帽蛮衣ヲ買弁シ夜間之ヲ服シ雙刀ヲ脱シ遊歩スルモノアリ 我輩切齒ノ到リニ堪ヘザルナリ」（元治元年四月十四日条 パリ）。

余談ながらこれはパリで洋服の写真を残したという乙骨でもあろうか。後に洋行した上田敏がパリの写真館で父の写真を発見したという挿話がある。

池田使節団は服装に厳格で随員一同に日本服を強制した。しかし規則を破るものも多かつたらしく、名倉の詩にはその不満をのべたものが散見する。

またヨーロッパにおいては語学的な限界ということも考える必要があるだろう。彼にとって異文化とのコミュニケーション手段はあくまで古典的素養にもとづく漢文による筆談であった。このヨーロッパ行きにおいてすら先にのべた「航海外日録拾遺」という上海での筆談記録を残していることが、逆に裏側から彼のコミュニケーション手段を証明している。

また日記によると、彼はその後、フランス郵便船に乗り合わせた中国人とも筆談を試み、詩を唱和している。

ヨーロッパ行の後、彼が行った建白（漢文）が「海外壮游詩」のなかに収めてある。それによると彼は鎖港の失敗を残念に思い、中国との連帯を説いている。

### またも中国へ

この後、名倉はまたも中国に赴いている。この慶応三年（一八六七）の旅にかんしては『三次壮遊録』があるが、私は京都大学が内田旭の蔵本を謄写した卷之三（筆語）つまり筆談の記録しか見していない。同行した浜松藩士・安倍保太の

「支那見聞録」(仮称——原文内題なし)を参考にしてこの旅を概観してみる。

慶応三年正月、幕府の命により商民数人を率いて上海、南京に赴いたと「名倉松窓伝」にあることは既に見たとおりだが、安倍保太の「支那見聞録」によれば、構成は九人。

「井上河内守内

名倉予何人

大林虎次郎

伊東甚四郎

安倍保太郎

田原藩故有当藩 八木財次

堀田相模守内

串戸五左衛門

渡辺 莊平

堀田摂津守内

鍋木 立平

高橋作之助」

である。

安倍保太郎は「火術修業」の名目で香港に行く旅券を外国事務局から得ていたが(安倍の日記に写しが記してある)、これは口実にすぎなかったものようである。安倍は町民で、名倉とは「恐らく特別の交際があり、度胸があったからであろう。保太は後に石油事業などを計画した人で、浜松出身としては、異色あると考える」と内田旭の「浜松の藩学」にある。安倍の手記では人名のうち伊東と安倍の姓名が一字下げているのは、この二人が商人であったのだろうか。

十二月二十九日、フランス軍艦「ル・モンジユ」で横浜出港、フランスへ赴く徳川民部卿昭武と補佐の向山隼人正、田

辺太一らと同日の出発であった。十五日上海着、アスターハウスに宿泊。小南門外理倉橋に名倉は仁伯王という人を訪ねている。その後は新北門外で妓楼に登ったり、フラダホテルで酒を飲んだり、遊山気分である。上海にもようやく日本人が増え、八戸順叔と岸田吟香が遊びに来るなど、緊張感のない日常である。

岸田はヘボンの『和英語林集成』を上海で印刷、校正する仕事で上海に滞在していた。八戸は謎の多い人物で早くから上海に居住している。のち日本が中浜万次郎に軍艦を買わせ、朝鮮を侵略する準備をしているという放言が慶応二年（同治五年）十二月広東の「中外新聞」にのり、朝鮮政府に日本との条約交渉を放棄させるという事件を引き起こした。ともあれ名倉は二月十四日に南京入り、十七日にはそこを離れ四月上旬には帰国していた。仕事の内容についてはもう一つはっきりしない恨みがある。

### 名倉における異文化——西欧とアジア

名倉には外国行にあたっての漢詩を集めた『海外壮游詩』（内題「壮游余韻」）があることはすでに述べた。

たとえば池田鎖港使節団にかんしては日時を追って漢詩が記され日記に近い体裁となっている。その意味では補助となるべきものだが、その詩情はややもすれば壮士風の型にはまっけていて、漢詩という体裁のもとで定型化された感情の表出が見られるにすぎぬ。

しかし角度を変えれば彼の異文化経験がそのような詩情に収斂すること自体がひとつの対応の事例となり得る。ヨーロッパ行にかんしては「三游海外小詩」と題して七十八首の漢詩をおさめる。まず巻頭から「文久三年十二月余陪公使将遊西洋臨発留別郷友二首」のうちのひとつ。漢詩の内包を伝えるために敢えて自由訳を試みた。

方寸久蔵十萬師 英雄心事有誰知

長風一劍航蒼海 五大洲中建國旗

〔文久三年十二月、自分は公使に侍して西洋に遊ぶこととなった。出発にのぞんで郷里の友への別れの詩二首。わが胸中に久しく十万の軍にもあたる英知と勇気を秘めて来た。その英雄の心を誰が知ろうか。一劍を帯びて風に吹

かれつつ青い海を渡る。孤剣よく天を支え得るであろうか。五大洲〔世界〕にわが日本の旗を高く掲げるのだ」

アジアと西欧を対比するという意識はその後も彼の詩を支配しており、かえって日録よりも詩においてその意識は鮮明であるとすら感じられる。

〔二月〕十三日泊亜丁港有感「二首

春日泊舟紅海頭 豈圖武徳在蠻流 正知黒鬼真男子 感慨長存独立州〔亞刺比卓尔不属西洋故云〕

山色玲瓏無寸碧 怪岩奇石看愈奇 天将雅境都閑了 不産神仙産黒兎

〔十三日、アデン港に泊して感あり〕

春の日に舟を紅海の港に留めた。野蠻人のあいだにも武徳があるうとは思ってもみなかった。鬼とみまがう黒い肌の人のなかに真の男子があろうとは。長く独立を保っていることに感慨をもよおす（アラビアは西洋に属せず独立を保っている）、このようにいうのである。

山肌は輝き、一片の緑もない。怪岩奇石が連なり見れば見るほど奇である。天はこのような雅境を作ったが神仙を産まずに黒人を産んだ」

この詩によつてはじめて私たちは、一人馬車を駆ってしきりとアデンの風物を観察していたように見えた名倉の胸の中をうかがうことができる。黒人にたいする差別の感覚は歴然たるものだが、しかしそのなかに真の男子を認めざるを得ないのである。ただし名倉はアデンが当時、イギリス東インド会社の直轄地となっていたことへの認識を欠いている。このヨーロッパへの旅の詩は、名倉は上海ではもっぱら懐旧の情をのべるにとどまったが、香港が西欧の地（虜境）となつてゐることを憂えて「我と支那とは唇齒の州」と中国に対する共感を記している。

安南沖では夷の船に身を委ねている自身やヴェトナム人を思い、英雄は航海術を学ばねばならぬ、といった感想をのべる。

しかし彼の壮士風の感慨は、次第に影をひそめ、旅愁が感情を支配するようになる。アデンでの感慨はその意味では突出している。

帰路には、一行の行動に気に入らない点があったらしく、しきりと周囲を「白眼視し」国を売らんとする者を罵る。あるいは鎖港交渉を中止したことそのものが気に入らなかったのかもしいない。彼もまた福沢諭吉の『航西日記』のように、アジアが西欧に支配されている状況を認識したことは確かだが、せいぜい唇齒輔車の関係をいうにとどまって、何らかの新しい行動なり意見なりを発展させることはできなかった。

慶応三年の中国行きにさいしても同種の訣別詩があるが、ヨーロッパ航海にくらべて感情の落差には注目すべきものがある。

〔慶応三年正月〕初五日 留別郷友

屈指記得第四回 春風復看異邦梅

松江垂釣好時節 一葉扁舟載酒来

〔慶応三年正月五日、郷里の友への別れの詩。〕

数えれば海外への四度目の旅。春風にふかれてまたも異邦の梅を見る。松江に釣り糸を垂れるには好季節。小舟に酒を積んで行くこととしようか〕

先のヨーロッパへの旅の心意にくらべるなら、だらけきった心情といえよう。彼はアジアの隠士風のを隠そうともしない。これはやはり異文化というものに対する態度の西欧とアジアにたいする際立った相違に由来するのであろう。

この旅にかんしても「四遊蜻蜓州外篇」という二十九首からなる詩があるが、唯一、志をのべた詩は南京の秦淮河中で太平天国の後の荒廃について述べた詩くらいなものである。

ついでながら、彼の外遊の回数の数え方がひとつ多いのは、蝦夷地へ行った経験を加えているからである。時期不明、名倉松窓伝にも書かれていないが、おそらくは文久より前である。安政以後、日本の自己確認が強まるなかで、蝦夷へ行くこと、つまりは他者を見ることによって自己を確認するという動きがあったことには注目したい。

この系譜には古くは菅江真澄、近くは嶺田楓江、玉虫左太夫などを挙げることができる。過渡期の知識人が国内の辺

境に異文化を経験し、内なる辺境に頼って自己確認を行ったという意味で（春名・二〇〇一年）無視できない経験であった。

### 重ねて中国へ

第四回の渡航は明治三年（一八七〇）八月で、日清修好条規締結の予備交渉のため柳原前光外務大丞を補佐した。名倉自身は外務省の文書大佑である。この抜擢はおそらく戊辰戦争のさい東海道先鋒総督を勤めた柳原のもとで働いたさいの人脈によるものであろう。

「海外壮游詩」には、戊辰戦争のさいに柳原と応酬した詩がいくつか収めてある。

八月九日上海到着、九月四日、天津に入り、十月十九日に天津を発したという（『大日本外交文書』）。

この渡航にかんする名倉自身の個人的な記録は現存しない。詩も残していない。したがって目下のところ論ずるに値するものは何もない。翌明治四年（一八七二）の日清修好条規締結のさい、柳原は副使となったが、名倉はこれに参与しなかった。病をもって職を辞したとされる。のち元老院書記、修史館掌記に任せられた。

最後の中国行きは明治二十一年（一八八八）五月である。時の台湾巡撫劉銘伝に招かれて、台湾に飲用水を供給する井戸を掘るために技術者を伴って行った。

劉銘伝は李鴻章系統の人物で淮軍の指揮にあっていた。名倉との直接的な関係がどこで生じたかは不明であるが、岡部三智雄の考証（岡部・一九九五）によると、李鴻章は日清修好条規の交渉のさい同治九年九月八日に柳原前光ら五人に会っており、名倉の名も文書に残っている。少なくとも李をつうじて何らかの接触の可能性があった。また台湾入りにあたって岸田吟香の門下の七里恭三郎を中国語通訳として伴っている。岡部は名倉の第二回中国行きのさいの日記を見ていないので、この時、岸田と名倉が上海で会ったことは可能性としてしか論じていないが、すでに記したように慶応三年三月に岸田と名倉は会っていたから、岸田の人脈に頼って七里を紹介された可能性は高いだろう。

削井は台北においてじっさいに行われたが、一井を完成しただけで中止となった。もっとも岡部は台湾にたいする日

本の侵略の危機を実感していた劉銘伝は、名倉を賓客として招き日本事情を聞き、状況によっては軍事についても参考となる意見を得たいと願っていたのではないかと、中国人の研究に依拠してのべている。聞くべき見解である。しかしすでに見て来たように名倉は壮士の気分の人ではあっても実務として軍隊の近代化に役立つような型の人間ではない。中国史料が語るように「経学を談じ、時勢を論じ、時に囲碁を楽しんだ」(王一剛「劉銘伝的日人幕賓名倉信淳」——岡部より重引)り、毎夕庭に出て刀を抜いてふるった(名倉松窓伝)付載の中村桜溪の文「松窓在劉幕下。毎夕出庭。抜刀揮之。踊躍以示武技」のは、名倉が東洋風な文人ではあっても、近代化の実務の人ではなかったことを如実に物語っている。実績としては井戸をひとつ残しただけで彼は台湾を去った。「名倉松窓伝」によれば、劉銘伝は、金を贈ってこれに報いた。また府学の教習職に任ぜられたとあるのは、岡部の考証のとおり劉銘伝が日本語教育の機関を設けようとして失敗したことと関連するのであろう。

### おわりに

名倉は自己の経験をきわめて定型的にしか活かすことができなかつたという意味で、幕末の旧型知識人の典型といふべきであろうか。私たちは新たな事物に接し、新たな経験をしたからといって、ただちに新たな認識をもち新たに行動するわけではない。

畢竟、私たちは見る(制度)の制約を免れないのである。その意味で名倉の経験と生涯は悲惨な記念碑として私たちの前にある。

### 注

この注において文献の発行地が東京の場合は省略に従う。

- (1) 拙稿「上海をめぐる言説——劉建輝『魔都上海』(講談社選書メチエ)と和田博文・大橋毅彦・真鍋正宏・竹松良明・和田桂子『言説都市・上海——一八四〇〜一九四五』(藤原書店)』『文学』(二〇〇〇年九、一〇月号) 隔月刊第一巻第五号 岩波

書店)。

なお劉は「想像の共同体」とか「国民国家」という用語を括弧つきで使ってベネディクト・アンダソンを読んだことをほめかしているが、じっさいにはアンダソンの「国民国家」の趣旨を取り違えているとしか思えない。風俗として思想をもてあそぶのはやめてもらいたい。もっともアンダソンのアジア研究者に及ぼした影響は広範なものだから、劉のみを責めるのは酷かもしれない。さらにいうならアンダソンを論じる場合、具体的なインドネシア社会を論じた論文集『言葉と権力』をも読んで上で批判的に摂取すべきだろう。

Benedict Anderson: *The Imagined Communities, Reflection on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised Edition, Verso, London & New York, 1991. 改定版にはかなり大きな改変が加えられている。

初版にもとづく白石隆・白石さや、の邦訳は『想像の共同体』(リプロポート・一九八七年)。同じ訳者による改定版の邦訳は『増補想像の共同体』(NTT出版 二〇〇〇年)。なおベネジクト・アンダソン『言葉と権力——インドネシアの政治文化探求』(中島成久訳・日本エディターズ・スクール出版部 一九九五年)を参照。

- (2) 衛藤藩吉「日本人の中国観——高杉晋作らの場合」／仁井田陞博士追悼論文集第三卷 日本法とアジア』(勁草書房 一九七〇年)、佐藤三郎「文久二年における幕府千歳丸の上海派遣について」／『日中交流史の研究』(吉川弘文館 一九八四年)。ジョシユア・フォーゲルの著書は——Josua A. Fogel: *The Literature of Travel in the Japanese Rediscovery of China, 1862-1945*, Stanford University Press, Stanford, California, USA, 1996. (日本人の中国再発見としての中国紀行一八六二—一九四五)。フォーゲルのいう「再発見」の意義は日本の中国研究者のあいだでは、十分に認識されていないように思われる。目下つぎの論文を準備している。

「中国再訪——An Introductory Note on “The Literature of Travel in the Japanese Rediscovery of China, 1862-1945”」／『調布学園短期大学紀要』三十三号／二〇〇一年

- (3) 『東洋文化』誌は東洋文化学会発行。(のち発行者の名称変更にもない無窮会発行に変更)。第一号(大正十三年一月)〜第二三四号(昭和二十年七月)。復刊一号(昭和三十六年十二月)〜。同誌五十号を所有するのは管見の範囲(つまり東日本)では北海道大学、東北大学、秋田県立、茨城大学、筑波大学、専修大学生田、東海大学湘南、東京大学総合、東京大学東洋文化研究所、慶応義塾大学三田、国学院大学、駒沢大学、無窮会(町田市)などの諸図書館である。

(4)

栗本松靄の筆録による「海外壮遊詩」(内題は「壮遊餘韻」)に収める。浜松市立中央図書館郷土資料室蔵「松靄邨舎文庫」の写本を底本とした。同室の『高林家文書松靄邨舎文庫目録』(一九六三年五月 同図書館 浜松(謄写版))には「壮遊餘韻(海外壮遊詩)名倉信敦(松窓)撰」として登録されている。なお同室にはコピーを洋装本に仕立てた『海外壮遊詩』がある(請求番号091-26-K)。本書は書誌的には『壮遊餘韻』(外題は「海外壮遊詩」)とすべきものではないだろうか。その方が内容にも合致する。線装(庚熙綴じ)、半紙半折、五十六丁。

名倉松窓伝にかんしては別に内田家に写本があり、石川は内田旭から借覧して校訂を加え頭注で示した。なお『東洋文化』五十号の「文叢」欄は内田遠湖によるもので「望嶽記」(天嶺 鈴木幹興)「跋李中堂書 代家兄」(遠湖 内田周平)「記事一則」(塵廬 辰巳小次郎)とともに「名倉松窓伝」を載せている。このうち「跋李中堂書 代家兄」にも名倉にかんする記事がある。当然、底本は内田家本であるが、栗本が校訂に使った松窓伝とも異動がある。内田家には数種の「松窓伝」があったのではないだろうか。

底本は正体の漢字に時として略体字が入り交じっているが、ここでは可能なかぎり正体(繁体)で示した。「……」は割注。また「松靄邨舎文庫」本の頭注で示されている内田家本との異同のうち「……」は内田家本にのみある文字。傍線を施して「……」で包んだ文字は内田家本と異動があるもの。

さらに『東洋文化』所載の「名倉松窓傳」のテキストで栗本松靄の校訂では触れられていない文字若干についてはアステリ(\*)を付けて注記した。

『名倉松窓傳』

文莊 石川兼六

名倉松窓。名信敦。字先之。松窓其號。又號予何人。初稱野田氏。通稱重次郎。其先遠州奥山人。南朝時有名倉主膳者。克勤王事。子孫世為神官。父信芳。奉濱松藩主井上公。從公移奥州棚倉。生松窓。〔松窓〕幼穎悟。年甫十一。任為吏。天保七年十二月。從公移居上州館林。後數年得暇。負笈遊江戸。執贄於佐藤一齋安曇良齋。後入昌平齋。研鑽不怠。弘化三年。學成歸郷。復從公移居於遠州濱松。蓋復舊封也。尋擢儒官。嘉永三年。再遊江戸。入昌平齋。再就箕作氏讀洋書。明年帰郷。安政四年喪父。哀毀過禮。明年辭職。文久元年。復遊江戸。慨然有感時事。就諸名家修兵法。明年春。航海遊清國上海。海

外之遊。以是為始。「此行與中牟田倉之助高杉晋作。從鍋田三郎右衛門。抵上海。幕府出一萬五千兩。於長崎購和蘭國船。名千歲〔丸〕。冒風濤而〔航〕。遂為通信通商之締結。有海外實錄著。」其夏歸朝。十二月特命賜世祿七十石。進階行〔人〕。掌文學及兵馬事。明年冬。再遊西洋。「法蘭西。」是為第二航。「此行隨池田筑後守。有航海日錄著。」

元治元年七月歸朝。尋進階步進士長。其職如故。慶應二年十二月。〔幕〕府特命賜遊清印章。明年正月。率商民遊上海及金陵。是為第三航。「有壯遊日錄著。」四月歸朝。遭王政維新。元年戊辰。公奉朝旨。出勤王兵。家老伏谷又左衛門為隊師。松窓為之參謀。隨副總督柳原公東征。尋為甲府市尹。明治二年春。罷職歸鄉。四月從公移居南總鶴舞。八月更任開拓大主典。十一月轉外務大錄。明年為大佐〔佐〕。是歲七月。隨柳原文書止。持節使清國。先是松窓建白通商事宜〔宜〕。政府可為。遂有此命。是為海外第四航。「有駐清謾錄著。」是時與清國〔彼〕大臣協議通商於天津內。約條成。柳原公贈詩云。數篇〔年〕策太公明。唾手一朝功業成。須鑿燕然山上石。先鞭正勤信敦名。閏九月歸朝。四年秋。以病罷職。後更任元老院書記修史館掌記。廿一年五月。應清國巡撫邵院劉三省〔名銘傳〕招。率井工到臺灣。是為海外第五航。三省為贈金若干。酬跋涉勞。蓋以舊友之故也。尋任府學校〔敬〕〔教〕習職。十一月辭職而歸。後有再遊臺通商之志。為奸商所欺而不果焉。廿六年一月罹病。自知不起。枕上賦詩。擬辭世作。後病少愈。自蠟殼街移根岸里。時征清之役方起。松窓慨然有〔時事〕詩曰。大風吹起遠征春。根岸移居避世塵。野老不知軍國事。一瓢盛酒待花辰。時松窓赤貧如洗。揭門以二牌。曰漢學教授。曰圍棋仙集。而家無長物。唯有破書數卷棋枰一局而已〔耳〕。

一夕近隣失火。延燒松窓屋。有門生澁谷某。驚惶走來。扶松窓而避焉。已而松窓罹病。乃招某。謝曰。余中歲以後。輾轉連遭。事與志違。子男先沒。曩航海之時。有著書數卷。我畢生精神所注。今空為蠹魚所飽。無所託者。舉以贈吾子。以聊報昔日之勞矣。後數月沒。年七十餘〔ママ。八十歳が正しい〕。實三十四年一月廿七日也。澁谷某與同門士謀。經紀喪事。葬橋場法源寺。某千住人。家世業商。以篤行聞。翁所著四次遊記外。有刀陣提要實操摘要續周易考日本記事等書。

石氏曰。余壯歲屢訪松窓於根岸里。松窓年七十餘。容貌甚醜。頭顱禿而齒牙豁。性頗嗜酒。杯杓不離口。醉則〔到〕賦詩。琅々〔琅琅〕之聲動障壁。有客談及時事。則曰。茫茫天地。已無知己。人間萬事。皆與違心。余復何言。嗚呼松窓夙有為志。規畫事業。中歲以後。輾轉落魄。身沒而名亦將堙滅。豈不悲哉。因為立之傳。

內田遠湖曰。松窓余父執也。家兄亦嘗問兵學。其兵要錄講義。今尚藏于家。翁少壯好遊。必有文以記之。其在濱松。著遠江紀〔行〕。又遊蝦夷。有所探求。翁快話善談。往々大言驚人。而人亦喜聽之。不為所厭。蓋快人也。但性闊達。持身不謹。

晩年因此獲微疾。容貌變而身亦不遇。信可惜也。因讀高文。記所聞見如此。

中村櫻溪曰。(余)去歲寓臺灣。臺父老猶說劉巡撫時事。松窓在劉幕下。每夕出庭。拔刀揮之。踊躍以示武技。時齡逾六旬。其健如此。臺北有舊井。松窓鑿云。

日下勺水曰。亡友小藥昌造與松窓同藩。爲余說其壯年敢爲之概。後十餘年。余始識松窓知於史館。頽然已老。有烈士暮年壯心轉悲之感。今讀此篇。松窓足以傳矣。

服部愛軒曰。松窓蓋有爲之士。而暮年落魄。誠可悲矣。然今得此傳。千古不朽。使松窓有靈。余知其莞爾。

藤田春堂曰。頗亦嘗同官吏局。恨當時不叩其所蘊。

\* 「松窓」の二文字、『東方文化』になし。

\*\* 「大佐」は『東方文化』では「大佑」。「大佑」は武官の地位であるから名倉にはなじまない。「大佑」とあるべき。

\*\*\* 「宣」の字、『東方文化』にしたがって「宜」とあるべき。

\*\*\*\* 一本「校」の字なし〔頭注〕。

なお名倉予何人については、つぎの伝記資料がある。

○石川莊六「名倉松窓伝」(前掲)

○内田周平(遠湖)「跋李中堂書 代家兄」『東方文化』五十号「文苑」欄。

○内田旭「浜松の藩学」／原載は『郷友』一号(同社 浜松 内田旭発行 謄写版印刷一九五五年)のち『内田旭著作集』

二(遠江資料叢書二)(浜松史跡調査顕彰会 浜松一九九四年)に採録。

○岡部三智雄「名倉松窓と劉銘伝——清末台湾における井戸開削事業をめぐって」／『台湾史研究』十一号(同研究会 一九九三年三月 大阪)

○白柳秀湖「松窓名倉予何人傳」(上・下)／『書物展望』第四—十一、十二号 同社一九三四年十一月 十二月)

○白柳秀湖「松窓名倉予何人傳」／『遠州学友会雑誌』第三十八号(一九三四年十二月同会 浜松)。浜松市立中央図書館郷土資料室所蔵のコピーによったので発行者その他の詳細は不明である。しかし内容は振り仮名に多少の違いがあるほかは『書物展望』所載の伝記とまったく同じ。そして内容にかんする読者からの手紙が欄外に掲載されていることから推定すると、『書物展望』への掲載が完了してしばらく時間を経た(少なくとも読者が(下)の内容にかんして投書し、

それが秀湖の手に入るまでの十日前後)のちに『遠州学友会雑誌』に掲載されたものということになる。雑誌の目上  
の発行日と現実の日時にはつねに多少のずれが予想されるから、必ずしも奇異とはいえない。

○浜松史跡調査顕彰会専門委員会『浜松の史跡』(同顕彰会 浜松市 一九七六年)五三〜五ページ。「浜松の藩校」(克明  
館)

○浜松史跡調査顕彰会専門委員会〔編〕『浜松の史跡』史跡 続編(同顕彰会 浜松市 一九七七年)七六〜八四ページ  
〔名倉予何人とその父信芳の霊域〕。

○浜松市役所〔編〕『浜松市史』全(一九二六年 浜松/影印による復刊/昭和四十九年)八九四〜五ページ。

○浜松市役所〔編〕『浜松市史』2(一九七一年 浜松)四二一、五三〇、五九八ページ。

○浜松郡〔編〕『浜松郡史』(一九二六年)

○引佐町〔編〕『引佐町史』(下)(一九九三年)

○『三百藩家臣人名事典』4(新人物往来社 一九八八年)一三九ページ。

### 〔引用書目〕

田中正俊「名倉予何人」(文久二年)支那聞見録』について』(山本(達郎)博士還暦記念東洋史論叢』(山川出版 一九七二年)

田崎哲郎「名倉予何人『海外日録』」『愛知大学国際問題研究所紀要』第八五号(愛知県 一九八六年十二月)

小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第二期第一卷(ゆまに書房 一九九八年)

春名 徹「一八六二年幕府千歳丸の上海派遣」(田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』(吉川弘文館 一九八七年)

同「中牟田倉之助の上海経験」(『国学院大学紀要』第三十五卷(一九九七年)

同「峰潔の上海経験」(『調布日本文化』八号(一九九八年)

同「漂流民の世界」(『浜下武志編『海のアジア』5越境するネットワーク(岩波書店 二〇〇一年)

浜松史跡調査顕彰会専門委員会〔編纂〕『浜松の史跡』(浜松 一九七六年)

浜松史跡調査顕彰会専門委員会〔編纂〕『浜松の史跡統編』(浜松 一九七七年)

Josua A. Fogel: The Literature of Travel in the Japanese Rediscovery of China, 1862-1945, Stanford University Press,

Stanford, California, USA. 1996.

ズンジャン・ホブソンの伝記にかんしては——

Alexander Wylie; Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: Giving a List of their Publications, and Obituary Notices of the Deceased. with the Copius Indexes. (Shanghai, American Mission Press, 1867. / Reprinted by Ch'eng-wen Publishing Company, Taipei, Taiwan.) Pp. 125-128.

「博物新編」にかんしては小沢三郎「中国在留耶蘇宣教師著作の切支丹禁制下における日本への移入」『幕末明治耶蘇教史研究』(日本基督教団出版部 1973年所収) および同「中国在留耶蘇宣教師の日本文化に及ぼせる影響」(同上)。また吉田寅「中国プロテスタント伝道史研究」(汲古書院 一九九九年)。

★「博物新編」の文久翻刻本にかんしては中山久四郎「近世支那の日本文化に及ぼしたる勢力影響」(連載七)／『史学雑誌』二十五編(十二号)八〇ページでは開成所訓点翻刻本(文久年間)を挙げているが、未見。一般的には元治元年の官板が知られる。他の復刻本にかんしては小沢三郎および吉田寅参照。

貧架には題僉に「再刊」と銘打った明治五年の「官許 福田氏蔵梓」本(元治官板の再刊本)を感している。なおこの時期の中国刊の宣教師の著作は、実用書として明治に至っても珍重されたが、翻刻にあたって多少の修正(多くはキリスト教紀元「キリスト教」の文字を削除するなど)が認められる。筆者はかつて「地球説略」にかんして仏法護法家が非難する文章が翻刻本には見当たらなかったもので、寧波刊の原本(静嘉堂文庫に中村正直の旧蔵本がある)と翻刻本のテキスト比較を試みたことがある。幕末明治期のこれら宣教師著作の一覧は小沢三郎が仮に「蔵書目録抄」と名づけた一覧が「謀者伊沢道一の報告書」のなかにある。小沢がいうようにこれは神戸在任のC・W・ウィリアムズの所蔵書籍目録と思われる。

原報告書は、早稲田大学図書館蔵「大隈文書」のうち、キリスト教関係(耶蘇教課者各地探索報告書)にある。マイクロフィルム。イ一四/A四一五四/四(謀者伊沢道一の「日記」壬申三月十七日到来分「蔵書目録写」三丁)。

市川渡「尾蠅欧行漫録」／『遣外使節日記纂輯』二(日本史籍協会叢書 一九七七年覆刻再刊 東京大学出版会)

岩松太郎「航海日記」／『遣外使節日記纂輯』三(日本史籍協会叢書 一九三〇年刊 一九七七年覆刻再刊 東京大学出版会)

三浦義彰『文久航海記』(冬至書林 一九四二年)——著者は池田使節団に参加した三宅復一の孫、つまり三宅良斎の曾孫にあたり、書中に復一の「航海日記」と「文久鎖港使節随伴記」を含んでいる。